

第2セッション

『語学番組の課題』

放送大学のカリキュラムの中で、語学は非常に重要な意味を持っている。それは単に量的な意味だけではない。入学試験によって選拔され、語学力に関してかなり均質な集団である既成大学の学生に比べ、放送大学で学ぶ学習者集団の語学力は、極めて広い分散を示すことが想定される。そういった学習者に対し、放送による大学教育がどの程度のレベルのどのような教材をどんな形で提供すべきかが重要な問題となる。第2セッションでは、実際に語学教材を制作された辻放送大学教授（独語）福井東大教授（仏語）、國吉千葉大助教授（英語）に、番組視聴を交えて問題提起をしていただき、さらに小川東外大名譽教授、放送大学の長谷川、青柳両ディレクターにも加わっていただいて議論を進める。司会は辻教授にお願いした。



パネラー	福井芳男	(東京大学教授)
〃	國吉丈夫	(千葉大学助教授)
〃	長谷川博之	(放送大学ディレクター)
〃	青柳成樹	(放送大学ディレクター)
特別パネラー	小川芳男	(東京外国語大学名誉教授)
司会	辻 埜	(放送大学教授)

○司会（辻放送大学教授）

ただいまから、午後の部を始めさせていただきます。

私、放送大学の辻でございます。このセッションの司会をさせていただきます。早速パネリストをご紹介しますと、こちらから長谷川さん。ディレクターとして活躍しておられます。それから、英語の國吉先生、フランス語の福井先生、それから、同じくディレクターとして活躍している青柳さんです。もうお一方、その道の大家でいらっしゃる小川芳男先生にお座わりいただきました。お姿をお見かけしたものですから、フロアの席ではなくて、こちらにおいでいただき、後ほど英語の番組の終えたところで、何らかのコメントをいただければ、との魂胆でございます。

司会者として多少お断りさせていただきたいことがございます。私自身は放送大学でドイツ語に責任を持ち、また、ほかに外国語の専任の教授がいらっしゃるらないので、外国語全体の責任者のような立場に立っておりますが、私としては、英・仏2か国語につきましては、皆目とまでは申しませんが、一向につまびらかにしないものでございますし、それからまた、ドイツ語そのものに関しまして——この点をはっきりお断りしておかなければなりません。私も、共同責任者として背後の広範な責任は負っておりますけれども、ドイツ語の番組、そしてきょう視聴していただきます『ドイツ語Ⅰ』の制作は、大部分、現在明治学院大学の助教授でおられる中山純さん、放送大学の方から申しますと中山純客員助教授の手になるものでございます。そのことをあらかじめ申し上げておき、私はドイツ語の番組でも、かなりの程度まで便宜的な処置として代表しているものであることをご理解いただきたいと存じます。ドイツ語のテレビ番組では、中山純助教授と、こちらの長谷川さんが制作に当っておられるわけです。

きょうのこれからの順序でございますが、私、司会の立場とドイツ語の立場を代表しまして、10分ほどしゃべらせていただき、それに続きまして、國吉先生、福井先生の順で、やはり外国語の授業をめぐる一般的な状況につき、一応のご説明をいただきたいと思います。

それから、英、仏、独の順序で、作りました番組をごらんいただきまして、それにまた、英、仏、独の順序でその都度その都度、つまり國吉先生、福井先生、それから私の順序で多少のコメントをつけさせていただき、そのコメントに応じまして、フロアーの方々からのご質問、あるいはご指摘、あるいはまたおしかりをいただきたいと思います。

私、何よりも望んでいるのはフロアーの方々からのおしかりでございます。先ほども自ら寺脇先生のご研究に対して討論の口切りをさせていただきました。ああいうふうに私の方に対しましても何か質問をしていただきたい、というお願いのつもりで致したことでございます。

それから、もう一つ申し上げておかなければなりませんのは、先ほどの第1セッションのご研究の成果に対比しまして、われわれの方は、研究をしない者の成果、ないし不成果をお示しすることになる、という点でございます。その点、ちょっと後でご説明いたしますが、本日の発表は、このシンポジウムのために研究したこと、ないしはふだん研究していることがここににじみ出てくる、とかあるいはまた、一致し共同して研究しているものがここにあらわれてくる、というものではございませんので、その点をお含みおきいただきたいと思います。

さて、この表題でございますが、福井先生、國吉先生とこの点で論議をしたわけではございませんけれども、まず英・仏・独の「語学番組の課題」と申しましても、その課題が何であるか、私どもにはこれまた皆目とまでは申

しませんが、はなはだしくわかっておりません。この事実を強調させていただきたいと思う次第です。

お手元に差し上げてございます刷り物に私もちょっと触れておりますが、ごく一般的にいいまして、大学の外国語教育というものが、かつての読むための外国語から、話し、聞くための外国語に移りつつある——この事実は一応認め得るかと思ひます。ただ、これはまたそれだけではなく同時に、——この点は福井先生が後でご指摘になると思ひますし、一昨日でしたが、福井先生がお書きになった朝日新聞の記事にもございますが——文学愛好者の語学から、そうでないもの、一般日常の新聞記事であるとか、あるいはやさしい論文であるとか、あるいは自然科学の論文、あるいはまた経済的な折衝とか、そういうものを含んでいる日常の言語へと外国語の履修が進みつつあるということを意味しており、その大局的な動きというものは否定できないところだと存じます。

ただ問題は、これが爆発的な大学生の増加という大学の大衆化と並行して起きているという点です。そのどちらが原因でどちらが結果であるか、これはとても判定できることではございませんけれども、大学内でも読むための語学から、聞き、話すための語学への移行が行われると同時に、実は皮肉なことにますますはっきりしてきたのは、話したり聞いたりするための語学というのは、LLを使おうが、テレビ・ラジオを使おうが、何を使おうが、結局のところ、大学が現在持っております語学のための授業の日数内では、とうてい効果をあげ得るものではないということです。こう申しあげると、ある意味では多少の疑念が残るかも存じませんが、一般的にいいまして、およそ話すためには聞くことができなければならず、聞くことができるためにはまた大変な学習時間が必要でございまして、大学の教養課程に外国語の授業

として任されている授業時間内では、とてもやりきれるものではありません。そうした意味で、現在の教育はかつての読むための教育から、話し、聞くための教育へと移行する途中の過程にございまして、つまりは両方がおそろしく中途半端になっているわけでございます。

これは先ほども申しましたとおり、大学の大衆化というものと並行して起きている現象でございます。したがって、ネガティブな面から見れば、学生は、外国語を話したり、聞いたりすることばかり好きになっているけれども、頭の方は本当にばかになってしまった、外国語の教育がますます学生をばか者にしているのではないか、というようなおしかりを受けると同時に、また、大学で外国語を学んで外国に行っても、その外国語は何の役にも立たない、買い物一つするにも役に立たない、ましてや、会議にでも出ようものなら、恥をかくためにしか役に立たないという意味で、一般の世間ないしは専門課程の先生方——この両者はいつも全く同じ意見です——からもおしかりを受けているという状況があります。

そうなりますと、結局、英語の場合のようにもうすでに学生がある程度まで進んでいる場合は別かもしれませんが、独・仏語にしても中国語にしても、またスペイン語にしてもロシア語にしても、大学に入ってきてから^AA、^BB、^CCを初めて習う学生に、文法を終えてから後もある程度まで進ませる、できるならば——ここがまた問題でございますけれども——専門課程の本も場合によっては読める程度まで進ませたいというふうに考え、それと同時にまた、日常の対話も可能なように進ませたいと考えるならば、いったいどういことが起こるでありましょう。

初級の文法を一応終えておくということには広範な意味にございまして、これは何にでも利用できる、あるいは言語の体系の違いを認識することにも

役立つわけですから、これは全くやらざるを得ないことであろうと考えられます。しかし、それから一歩進みまして、どういう分野のことをどういうふうに教えるのか、となりますともうさっぱりわけのわからない状態の中に入ってしまう。そういう場合に、まあそれでも文法を終えた次の段階であらゆる分野に共通する基礎語学力というようなものはないか、そういうものがあるならば、それを見出したい、つまり、読むためにも、聞くためにも、書くためにも、しゃべるためにも、すべてに利用できる——基礎語学力というものをつくりだした——といったら語弊があるかもしれませんが——見つけ出していくこと、しかし本当に場合によっては、日本で、日本の特殊な状況に応じてつくり出していくこと、そういうことができるかどうかという点に、一部無意識的ではありますが、語学の先生方の努力が皆かかっていると思います。

それと同時に、司会者の立場も含めまして、きょうのこれからの手順との関係で、2、3の指摘をあらかじめ行なわせていただきますが、その第一番目は、私たち、番組の制作に当り、主任講師としての立場で制作に当たった者は——もう一度強調いたします——英・独・仏の間で制作以前に何一つ相談を致しておりません。これは全然いばれた事態ではございませんので、それをいばって申し上げるのはきわめておかしいことなのですが、先ず第一に私たちにはそんな時間が全然ございませんでした。とにかくにも、自分が持っている在来知識と、与えられた環境というものに依拠して、何はともあれつくってみる、という以外に手がなかったわけでございます。

もう一つ、単純に時間がなかったというだけではなくて、つくる前にこれ話し合っても、言語化するには余りにも条件が複雑過ぎて有効ではないだろう、有効であろうとはとても予測ができなかったこと、これがございま

す。

それから三番目には、私が当面のお世話役としてはなはな怠慢であったということもあると思いますが、それはまあお許しいただくとして、重要なのはこの二番目の理由でございます。いってみれば、二次的な現実としても考えられるテレビというものを語学教育に用いる場合に、これをどういう立場から用いるかということ、言葉にあらわして説明し合って相談する、研究し合うためには、よほど経験を積んだ専門家とテレビというメディアに慣れた社会とが必要とされるわけでございます。もともと言語そのものが生活に即して非常に複雑多岐なものでございますが、一言語の内部でもどの言語を使うか——これもちょっとお手もとのパンフレットに書いてございますけれども——われわれ、外国語を習うといいますが、その当該の外国語を全然知らないものですから、つい一つの総体として考えがちでございますけれども、われわれがこうして使っている日本語というものも、その中で今私が使っている言葉は、ほかの分野の日本人の方々には非常にわかりにくい言葉を使っているようでございますし、日本語の中で、たとえば新聞記事に日常出ております株式の話は、私も50何年以上新聞を読んでいますけれども、いまもって皆目わからないという次第でございます。そういう意味で、「外国語」と言ってそれを総括すると、何かそういうものがあるかのように錯覚されますが、実際はわれわれが日常の生活の中でも駆使している日本語というものは、きわめて分野の狭い、きわめて特殊な言語であって、その中で一応通じるという土台を持っているにすぎないのだということは、忘れてならない点だと存じております。

そういうふうに、言語というものは非常に複雑なものですから、生活のどの面での言語を取り出してここで教えようとするか、ということが問題であ

る上に、テレビのように、実際にわれわれが情報であるということを自覚できないままに猛烈にたくさんの情報が入れこまれているようなものを使いまして——使いましてといえますか、その現物を見ながらならばまだよろしいのでございますが、その現物を見ないうちにそれについて研究・討論するということはほとんど不可能なことであり、また、それをどんなに強調しても強調し足りないくらい、経験を積んでいない者ないし統一的な理念をもっていない者にとって、テレビの情報量は多いのだ、多すぎるのだ、ということをお願い申し上げさせていたいただきたいと思います。先ほどのお話でも、太田先生が、テレビでつくるといのは非常にむずかしいとおっしゃっておられましたが、私たちも、全くその点では同感でございます。

そういう意味で、本当はシンポジウムとははなはだおこがましいのでございますが、この席でやらせて頂くものが、共同研究の始まりでございまして、その意味では、ご研究が進んでいる先ほどの寺脇先生の立場とは全然違います。きょう、会場の方々のご助力も得まして、研究会発足の契機とさせていただきますというのが、私どもの真意でございますので、その点、ひとつおわびを申し上げると同時に、また、ご援助をお願い申しあげたい次第でございます。

もう一つ、指摘させていただきたいのは、私たち制作に当りました者が、先ほど矢部先生のお話にもちょっと出ましたように、放送大学が他の一般的な大学に比べていかなる点で異なっているのか、あるいは異なることになるであろうかという点で、これもまた、いばれた事態ではございませんけれども、何らの明確な認識を持たないままに発足しているという事実であります。これも、きわめて異様に聞こえるかもしれませんが——また、私自身、きわめて異様と思っておりますけれども——事実でございますので、申し上

げておきたいと思います。

そして、われわれが放送大学がほかの大学とどういう点で異なってくるであろうかということを配慮して番組をつくったとは言えない、少なくとも、その明確な意識というものはなかったのだ、ということを申し上げたい最大の原因がどこにあるかと申しますと、これは少し大げさに聞こえるかもしれませんがけれども、実態への対応という言葉に直させていただきたいわけでして、とにかくにも、出てきた現実に対して対応するということが最善のものであるという、これは私、わが国の思想的といいますか、感性的といいますか、国是であると思っておりますが、まさにそういう事態にのっとっていることだと思っております。

これがまた、何を意味しているかと申しますと、たとえば英語の受講者が圧倒的に多いだろうということ、外国語の8単位というものが必須として課せられているためにそういう事態になろうということ、それから、30代、40代の主婦の方々がかなり多く入学されるであろうということ、そうしたことは放送大学の場合に一応は予想できる事態でございます。しかしその一方で、生涯教育といいますものが本当に概念的に規定できるようになりますのは、結局は放送大学の成長と同時に起こることございまして、この点、場合によりますと、日本の特徴というものが現われているわけでございます。つまり、ある概念が、はっきりとした概念としての力を持つ、あるいは明確な輪郭を持つに至るのは、やはり制度によらなければならない、しかもそれはしばしば、国から出てくる制度化の動きに応じている、という日本のわれわれの状態というものがそこにあるのだと思います。

一方では、放送大学は伝統的な大学であることを明確に宣言しております。日本で生涯教育というものを初めて大きく制度化する放送大学が、その

生涯教育と伝統的な大学というものの概念とをどうやって自らのうちで一致させていくかということは、また少し観念的になりますが、やはり相当むずかしい問題であり、放送大学としましては、生涯教育の大学であるということとを明言しながら、そしてそれが在来の伝統的な大学の一つであるということによって、大学の概念に新たな分野を入れ込んでいくことを目指す——結局それが任務になっているのが放送大学であろうと存じます。

そういう意味では、放送大学が「何であるか」という概念形成は実態の調査とか実態に応じた対応によってのみできるものではありません。放送大学が「何であれ」という極めて強い理念的な動きによってしかまとめあげることのできないものを持っているわけでございます。ところがしかしこの理念的な強い力というものが、放送大学には現在のところまだございません。それは、私、必ずしも悪い意味で申し上げているのではなくて、それがなくて実態に対応して進んでいくというのが日本の社会の国是でありまして、いいにしろ、悪いにしろ、そういう状況になっているということを申し上げているのでございます。

すなわち、これはまた少し弁護をさせていただきますけれども、放送大学は何であれという理念的な力が日本にはある程度欠けているということから、われわれには、放送大学の外国語の番組をどういうふうにつくれという意味での意識的なものは、現在まだない、ということを申し上げたいと思います。もちろん、しかし、若干は普通の大学と違うのじゃないか、といろいろな予感が働いていることは確かです。しかし、それを意識的な言葉に直して申し上げるほどには進んでおりません。

三番目に、ここで要約させていただきますが、こういういろいろなハンディがあるにもかかわらず、これもお手もとのパンフレットに書かせていただ

きましたが、一言でまとめてしまえば、authentic（オーセンティック）と申しますか、ドイツ語が私には一番通じるのですが、authentisch（アウテンティッシュ）「真正な」という性格は、一応英・仏・独の番組の指向するものとして、あくまで理念ではございますが、はっきり見てとれるものになっていると思います。

これも、結局のところ、ご相談申し上げて研究の末にそういうことになっているのではなくて、それぞれの立場の者が自分たちの状況の中で苦慮してつくりましたものが、最後に言葉にしてまとめればこういう言葉になっていた、というふうに感じている次第でございます。

英語は、本国でできましたテレビドラマを非常に多く用いておりますし、フランス語はアニメを使っておりますし、ドイツ語はドイツ語で、西ドイツにおけるロケによって得た資料というものを、非常に多く用いております。

じゃあテレビドラマは authentic（オーセンティック）なのか、アニメは authentic（オータンティック）なのか、西ドイツで撮ってきたロケならばそれで authentisch（アウテンティッシュ）といえるのかといいますと、それぞれがそれぞれと大変違います上に、それぞれがまた、全然 authentic でないということも十分言えると思います。しかし、総括して現在ほかで使われているものと比較しますと、authentic であろうとする指向は非常に強い、と私は感じております。ここにも問題がございまして、必ずしもそうはまとめられない、英・独・仏をまとめて一言でいえば「混乱」だ、あるいは「安易」だ、あるいは「効果なし」だということ、そういうまとめ方も十分あると存じまして、おしかりは十分受けたいと思いますが、私の立場としては、authentic という指向を強調させていただきまして、その authentic な指

向の内面を、また、なぜそういうことになってきたかということ、この席にご出席の方々のご助力を得て多少とも意識化できれば、このシンポジウムは成功したものと解釈させていただきたい——大変甘えているかもしれませんが、そういうふうを考えさせていただきたいと思います。

もうすでに前おきが大変長くなりました。以上、私、2、3の点を指摘させていただきまして、司会兼ドイツ語の番組制作者としての言葉を終えさせていただきたいと思います。

早速でございますけれども、國吉先生、英語の立場として全般的な状況についてのご指摘をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

○國吉（千葉大学助教授）

『英語Ⅰ』の放送番組を担当した一人としてここに出させていただきますが、東京大学の鈴木博先生がこの『英語Ⅰ』の前半16回、私が後半14回を担当しております。いま辻先生からいろいろお話がありましたが、『英語Ⅰ』の中でも、それほど私たち二人が密にお話し合いをしてこの番組をつくったというわけでもありません。しかし、もうかなり前ではありますが、昭和47年、8年、9年でしたか、文部省から、放送大学（仮称）学習体系に関する調査研究協力者という依頼がありまして、そこで数名の人たちが集まって放送大学（仮称）の放送番組を作成するにはどうしたらいいか、どういう理念のもとに作ったらいいかというようなことなどいろんなことをディスカッションしたり、それから、実際に、具体的に番組もつくってみるというようなこともやりましたし、そういう過程でいろいろお話し合いをしております。それから、その後放送教育開発センターが発足して実験番組がつくられましたが、その際、15回の『英語Ⅰ』の番組をつくりました。その番組をつくるに際しても、いろいろお話し合いをしたり、つくったものに

ついでお互いに話し合ったりということはやってきておりまして、暗黙のうちに、共通理解、共通する考え方が生まれてきていたとって差しつかえないと思います。

『英語Ⅰ』には、お手もとのレジュメにも書いておきましたが、副題に、－ An Introduction to Living English Speech －とありますように、話されている英語、話し言葉の英語のありのままの姿を学習の対象にしようという非常に強い基本的な姿勢があります。それで結果的に映画、テレビドラマ、これをかなり中心的な材料として使うことになりました。放送大学は初めての試みでありますし、先ほど来、午前中の会でもありましたけれども、対象がはっきり見えていません。特に、英語の場合には、一般的には中学校3年、高等学校3年、合計6年間の英語教育を受けているはずの学生を対象にするということはあるのですが、どのくらいの力があるのか、皆目見当がつかない。学習経験は、なるほど六年間は持っているでしょうけれども、どの程度の力を持って入ってくるのか、恐らく幅は非常に広いであろうというようなことを考えますと、これは至難のわざといってもいいのではないかと思います、非常にそのところに苦労したのであります。

しかし、鈴木先生と『英語Ⅰ』の番組をつくりまして、お互いに共通した考え方が見えてまいりました。それはやはり第一に、生きた人間の言語としての英語を学習の対象とすることです。したがって、英語を文字の記号の連続、これを返り点をつけたりして漢文式に判読するような力、そういう力ではなくて、あるいはそういうふうに非常に限られた力を対象にするのではなくて、生きた人間が、それで生まれ、生活し、そして文化を形づくっていく、その生きた言語を対象にしよう、これがわれわれの基本的な考え方です。

ちょっとご参考までに、そちらにお見えの小川先生が、現在名誉会長をしていらっしゃいます、大学英語教育学会に教材研究委員会という研究グループがありますが、そのグループが1981年11月に『大学一般教養課程における英語購読用教科書のあり方』を出しました。そこに、大学における英語教育の目的というのがまとめてありますので、ちょっと読ませていただきます。

1. 中学校及び高等学校で培われた外国語の能力を定着、発展させ、将来の職業上その他の必要を満たす基盤を強化する。
2. 異なる言語構造を持つ外国語を学習する過程で、母国語に対する意識を喚起するなどして、言語一般に対する関心を深める。
3. 他国の多様な文化を正しく受容すると同時に、わが国の文化を広く紹介し得る知識・能力を養うことによって、国際理解を推進する。

一番目は、将来の職業上の、研究者になるのであれば研究者としての必要、企業に入るのであればその必要など、将来の職業上その他の必要を満たす基盤を強化する、そういう力をつける。二番目は、いわゆる教養的といいたいでしょうか、人間として幅を広くするための、そういう目的。もう一つは国際理解を推進するという考え方です。さらに、ちょっと別の資料を見てみます。これは慶応大学の小池生夫先生を代表者として12名ほどが集まりまして、『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究(I)——教員の立場——』と称して、文部省の科研費補助金をいただきましてやった研究のレポートですが、アンケート調査を実施した結果、大学の英語の先生方、大抵現在7千名でしょうか、そのうちの回答をいただいたのは3千名に対して千名

いただきましたが、その結果でございますが、「目的・目標」というところに、こういう質問項目があります。

大学での一般英語の第一目的は主として何だと思いませんか。

1. 英語によるコミュニケーション
2. 国際人の養成
3. 教養を高めること
4. 専門教育の基礎力養成
5. その他

となっております、これはどういう結果になったかといいますと——「主として何だと思いませんか。」ということで質問項目をつくりましたので、当然重複した方が相当数いたわけではありますが——全体千名の中で一番数の多い回答は、3番目、教養を高めること、これが520名でした。それから1番目、英語によるコミュニケーション、これが470名、それから4番目、専門教育の基礎力養成362名、2番目の国際人の養成は179名、その他となっております。これは大学の英語教師の意識であります、ここに盛られた結果も、さきほどの教材研究委員会がまとめた目的、これも常識的にはすぐ受け入れられる当然の目標、目的、考え方、意識だろうと思われま

では、これを達成するためにはどうするかと考えますと、やはり私がお手もとのレジュメの一番目に挙げました「生きた人間の言語としての英語を学習の対象とする。」というところ、これをしっかり押さえないと、非常に偏ったものになってくるのではないかと思いますし、これをしっかり押さえれば、すべてに通ずる良い結果が生まれてくるのではないかと考えておりま

す。

英語を生きた人間の言語として扱うわけですから、話したり聞いたりする言葉、つまり、音声により言葉を基盤として英語を扱うことになります。考えてみますと、人間が生まれて言語を獲得する過程は、音声言語を通じてやっていますし、日常生活も、音声言語が占める割合が非常に多いわけですし、精神生活も、音声言語によっているところが非常に多いと思われますし、言語の発達の歴史をみても、文字はずっと後からできているものですから、言語の本来の形といえば、音声による言語だろうと思うのですね。

さらに音声音声といいますが、音声だけではなくて、実は人間の言語行動では、音声とともに非常に密着した形で体の表現が、つまり目の動き、顔の表情の動き、体の構え方、手の動き、そういうものも全部含まれてくる。非常に生々しい、肉体と一体となった形で言語はあるといってもいいと思います。

そういう観点からしますと、先ほどの辻先生の、生きた人間の言語の実態をとらえるために、あるいは実態を学習の対象とするためには、本物の英語といいたいでしょうか、本当の姿、これを材料にすることが最もいいのではないかというふうに考えたわけです。

つまり、二番目に入っているわけですが、学習の材料をできるだけ生の、本物の英語を中心として扱う。カラーのテレビジョン放送は大変素晴らしいことでありまして、いままでの教室ではほとんど不可能だったようなことがいろいろできるわけです。特にテレビドラマとか映画を中心的な学習材料にすれば、生きた言葉の材料を提示することができて、素晴らしいことができるのではないかと考えたわけであります。

ただ、45分の30回というふうに非常に時間が限られるわけでありまし

て、私たちの考えていることをその45分の中に盛り込もうとすると、いろんな制約があります。そこで印刷教材を重視しまして、放送教材と連動させる形で、ドラマのスク립ト、注、日本語訳とか、音声面も含めた解説とか、写真、図、テレビでは出せなかった練習、そういうものなどを盛り込んで補完するという考え方をとったわけです。

以上、私たちが基礎にした考え方というものを大体お話しいたしました。これでひとまず終わらせていただきます。

○司会

ありがとうございました。福井先生、続いてお願いいたします。

○福井(東京大学教授)

やはりわれわれの一番の問題というのは、学生がどういった水準にあるかということが全くわからないことです。現在でも、私が奉職しております東京大学の学生と、その他いろいろな形で教える機会を持った学生たち、水準の高いところ、水準がどうかもよくわからないところ、そういった中で、どこに的をしばったらいいいのかわからないのが実情です。たとえばカルチャーセンターあるいはほかの外国語、フランス語を教えている学校に行っている人たち、あるいはNHKのラジオ、テレビのフランス語の番組を視聴している人たちへのアンケート、そういったところに出てきている漠然とした自分なりのイメージで、ある程度想定をしないとできない。そして同時に、大学であるからには、要するに、15回、45分の番組である水準に達したと仮定して、単位を与えなければならないわけです。

それから、われわれの場合、テレビとラジオの併用ということで30回、4単位というものがあって、これだけあればある程度のものは原則としていけるであろうというこちらの想定もあるわけです。さらに学生がどういった

欲求でフランス語を始めるのか、大体単位をとるだけとるだったら恐らく英語に行くと思うのです。あるいは自分の英語に失望してフランス語でもやってみようか、これはかなりいると思っていますけれども、そういったのは大抵だめなんで、そういった人たちが来るのか、もっと積極的にフランス語を学ぼうとする人が来るのか、まず水準をどこに合わせるかということは、どの程度の単位を吸収することができるのか、こういった状況ならば受け入れてくれるのか、それからはみな想定でやっていかねばならないわけです。また大学にはある目標がございます。フランス語に関していえば——まあドイツ語もそうですけれども——この大学では原書購読という目標が現在のところございません。そういった各専門分野での原書購読へ至る道、そういったものはございませんから、これはある程度ここまでいけばよろしいという水準を、こちらできめることしかできないのです。

じゃあ一体どの程度の力、要するに、先ほどいいましたように、理解力をどの程度つけて、自己表現力がどの程度つくのか。自己表現力といってもスクーリングを通じてある程度実際の機会を持つ練習以外に、向こうが発表してくる力というものをこちらが測定する基準はございません。

さらにいえば、われわれはフランス文学の出身でございます。やはり文学というものにあこがれて、フランス文学、フランス語を始めたわれわれが、先ほどちょっと申し上げましたように、これは大衆化のせいでもあり、国際協力が発達したためでもありますけれども、文学以外のフランス語の需要が非常にふえてきている。文学に関する需要が減るのも当然な現象かもしれません。でも、そういったところで、大学全体のいまの教育の体制というのは圧倒的に文学教材を使っておりますので、現在大学で使われている教材そのものが当てにならないということもございます。

そういった状況を全部踏まえますと、じゃ、一番学生たちがどういった形で勉強したがつているか。辻先生は、レジュメの中でかなりラジカルに学生を二分されまして、片方は法学その他の原典を読もうとするかもしれず、また学生の中の相当数は、「親のお金でゆうゆうとヨーロッパ旅行」——この表現はちょっとかわいそうな気がします——要するに、ある程度のエリート、フランス語をやりたい、本当にやる、当面の目的は別として、やりたいというエリートの人たちの養成に焦点を合わせるのか、あるいは「アンアン」、「ノンノ」を読んで、それを片手に持ってフランスへ行く人たちに焦点を合わせるのか、という問題は、前からわれわれもしょっちゅう論議しているところです。しかし、「アンアン」、「ノンノ」を読んで、これはアンノンの悪口になっちゃまずいのですけれど、そういった人たちの、逆にフランス語への愛情といいますか、フランスへの愛情というものが一般的に支えになったり推進力になったりするだけに、それをネグレクトすることはわれわれとしてはできない。

それなら両方にターゲットを合わせようということはまた同時にできないので、実をいいますと、私たちの放送大学における教育が有効であるためには、これは時間数をふやしていただくか、あるいはスクーリングの機会をふやしていただくか、そういったことでしかあり得ないと思っておりますが、これはちょっと問題が違いますので差し控えます。

私といたしましては、ここに構成の面で書きましたように、昔はかなり構造主義的でありまして、構文練習、英語でいうと pattern practice (パターン・プラクティス) ですか、フランス語で exercice structuraux (エグゼルシス ストリュクチュロー) と申しますが、それを中心にして文法を与えて、構文を与えて、それを総合していけば、少しはフランス語がしゃべれ、

かつ、構文がわかるようになるだろうと思ってやっていたわけですが、それでも非常に足りない問題もございます。そうすると、あらゆる状況に応じる能力と、もう一つは、語彙によってできてくる世界像、そういうと大げさになりますから、ある専門分野に関する単語だけでもいいのですけれども、そういったものの使用能力が不足いたします。

ですから、まず状況を与えてしまって、その中でこういうフランス語を使っていたなということを耳に残す。その意味で、私がいままで長い間関係しておりました中で、一番理想的だったのは、昔でございますけれど、丸山圭三郎氏がニコラ・パタイユ氏と組んでNHKでやっていた教材です。あれはすぐれた俳優の力と脚本の力で——それらは両方ニコラ・パタイユ氏がやりましたが、文法その他のカリキュラムの編成は丸山圭三郎氏がしておりました——フランス人の間でも非常に評判が高かった。水準の高いものが与えられた。あのときにNHKのテレビの視聴率が非常に上がったことを覚えております。それが私の頭にありますので、そういった形で向こうから俳優を呼んで、脚本もフランスの脚本家と一緒につくる、そういったぜいたくがやれれば結構ですがそれは一応無理でしょう。あとはもう自分で物語をつくってやる以外に手がないということで、アニメを使ってみました。これは一貫した物語をつくるという意味でございます。それについて後でご批判をいただきますが、やっぱり一貫した物語をつくると、かなりフランス語がむずかしくなります。

だから、これはただ聞いて目によって理解することで幾つかの音が耳に残ればよろしい。そしてその中で重要な表現をゲストに繰り返してもらう。そして、そこで口の形、そういったものを見してもらう。そしてまねしてもらう。そこで発音習慣をある程度つける。発音の問題と書くつづり字の問題と

というのは、放送教育では一番むずかしい問題になってまいりますので、それはスクーリングをやらなければならないところです。それから、構文練習は時間の関係で少なくいたしました。それから後、それを応用しなければなりませんので、応用の会話、それをやはりフランス人にスケッチとしてやってもらったということでございます。そして、聞き取り練習、つまり、音による理解力をかなりつけて、あとそれを若干自分で表現する力をつけるということを目指したわけでございます。

そういった形で、簡単にご説明しましたけれども、テレビの利用というのはもっともっとできるのじゃないか、あるいはカリキュラム自身をもう少し変えたものにしなければいけないのではないかというような個人的な反省も持っております。

以上でございます。

○司会

ありがとうございました。それでは、よろしゅうございましょうか。早速、英語の番組の視聴をさせていただきたいと思います。お願いいたします。

[ビデオ映写]

○國吉

いまビデオを見ていただきましたので、私のレジュメの一番最後のところに挙げてあります番組の構成についてというのを見ながらお話ししようかと思っています。

まず最初に、「復習とテスト」というので、テストがありました。テスト

は、実は私の番組の14回のうちの8回は同じようにああいうふうにやりました。つまり、セリフ表現を途中でとめて、音も画もとめまして、そのとめられた表現を学生は口に出してという問題ですね。これは宿題になっておりますが、印刷教材を見てよく理解し、意味もはっきりさせて、訳もついておりますし、解説もついております。そして、まずテープレコーダーで録音しておいたり、できたらビデオで録音しておいたりして、何度も練習して、とにかくすらすらと口に出せるようにする、それがまず第一。口の体操でも何でもいから、とにかく口にすらすら出せるようにするということです。

それから、訳を見たらすぐ英語が出てくるようにするというのを、第二番目の宿題にしております。これは少し程度が高くなるわけですね。日本語訳がありまして、左側に英語のテキストが印刷されておりますが、左側のを隠して右側の訳を見て、訳は何も単語一つ一つを操作して英語にするのじゃなくて、一つのテキストのキーとして、手がかりとして、ちょっと見てぱっと英語が出てくるように、それくらい練習するというような宿題をしているわけですね。最初に、番組の第1回目にお話してあるわけです。そういう前提ですが、途中でぱっととめて、その表現を完全な形で口に出して再現する。そういうことであります。私は非常におもしろいテストだと思うのですが、学生の方はむずかしいというかもしれません。実は、そのテストをやりながら復習も兼ねておりまして、前後1回ずつしているわけですね。これも、考え方がだんだん変わってまいりまして、おしまいの方ではほとんど全部見せるようになっていきます。回をだんだん重ねるにつれて、これの方がいいだろうということで、そういうふうにしております。

また、このテスト自体、こういう形式のものは前半8回で、後半の6回は

ディクテーション・テストにしています。これは変化をつけた方がいいんじゃないかということと、やはりディクテーションは、表現を正確にするためにも非常にいいんじゃないかという理由です。ここにいらっしゃるディレクターの長谷川さん、青柳さんが、いろいろ考えて下さったのです。事前にはぱっと合図が出まして、問題の表現が出ることを知らせます。そして一つの表現が終わったところでとめる。いま終わった表現を書いて再現しなさいというテストです。これも内容は、私なんかにいわせますと、非常にやさし過ぎると思われるようなテスト問題になりましたけれども、学生たちはどう思いますか、わかりません。これも前後全部見せるようにしますので、復習の形になっております。これが1番目の「復習とテスト」です。先ほどはほんの一部、2問ほど出てきたと思いますけれども……。

それから二番目、これは「ドラマの視聴」——その日に学習する対象となるドラマの視聴ですが——その前に、いまご覧いただいたように、私のイントロダクションがあります。このドラマは“FAMILY”という、アメリカでつくられたテレビドラマで営業放送されたものです。日本でも実は放送されましたが、たしか50分ちょっと、コマーシャルを入れて1時間のものだったと思います。“An Eye to the Futuer”という副タイトルのこのテレビドラマを、8回で私は扱いました。いまご覧にいった部分は3分42秒です。大体3分から4分ぐらいの長さのものを材料にして、それを正味43分の番組に料理をしたというわけです。そういうことですので、とびとびになっていくわけで、その間を埋めるためにイントロダクションを私がしていたわけです。

さあ、そしてその3分42秒のドラマの視聴が終わります。三番目になりますが、ネイティブスピーカーのエリック・ベレントさん——この方は私の

同僚でありまして、千葉大学の外国人教師であります——それからジャスティン・モリアティーさん——この方は長谷川さん、青柳さんの方で探してくださった非常に有能なアメリカ人であります——このお二人をゲストとして使わせていただきまして、この3番目の「Q&A」の部分をつくっております。これは文字を与える前に生の言葉でとにかく少しでもわからせるという基本的な考え方によっております。生の言葉をとにかく少しでもとらえさせるということで、いろんな手だてをするわけですが、その非常に重要な一つの手だてとして、question and answer があるということになります。できるだけやさしい question を用意して、答える方も意識して、それにスタジオで録画したものですから、テレビドラマの音声よりもずっとはっきりと聞こえてきます。学生にはずっとわかりやすいはずですが、しかし、普通のスピードの英語ですから、力がついていないと難しいかもしれない。これは当然のことではありますが……。

それから四番目の「ドラマの細分視聴」となります。ごらんいただいたように、この日のドラマの場面を細かく分けて、全部で3分42秒の場面を六つから八つぐらいに細分しまして、一つ一つについてまず見せて、そしてゲストのエリックさんとジャスティンさんに同じ言葉をいってもらうのですね。これは言語行動としたら、じっと座って話しているわけですから、ずっと抽象的だといっていい、あるいは素材だけの、非常に味気ないものといってもいいでしょう。しかし、学生の方からしますと、ずっと聞きやすい形で再現されるわけですね。

その後、さらに私が、ストーリーを学生がとにかく自分の力でとらえることができるように補助するという形で、そういう気持ちで、解説を加えております。必要な場合には、その意味も与えました。特に、後半の番組では、

むずかし過ぎるかなと思われるような表現も出てきて、日本語の同等表現も加えました。しかし、それはできるだけしないで、必要な、キーになるようなセンテンスを私がもう一回繰り返してやる。そして大体ストーリーの見当がつくような解説の仕方をしました。ですからオリジナルのドラマの細分したものと、それからゲスト・スピーカーズの二人の英語、それから私の解説付きの英語が入るというわけですね。これでセットになりまして、これが六つ、七つ、八つ、それで3分42秒の場면을全部カバーする、そういうやり方です。

こうしますと、わからない、とても歯がたたないと思ったに違いないドラマの場面が何となく見当がついてくる。できる学生だったらほとんどわかる。実は、テレビ朝日から放送しました実験番組でも同じようなやり方をしましたが、私のところの専門の学生に勉強させてみますと何でもありません。もうこうなってきますと何でもなくわかるということでした。でも放送大学の学生は専門ではありませんから、まだまだ大変かもしれません。とにかく、ドラマの視聴をもう一回やらせます。そうして、PHONETICS Corner となります。これを私は真ん中に持ってきました。これは変化を与えるため、それから、言語の科学的な見方に興味を持っていただくという考えで入れたわけです。

PHONETICS Corner を設けて、私の場合には英語の音声の流れ、言葉の流れを中心に、ストレス、リズム、イントネーション、ラウドネスの変化、クオリティの変化などについて扱いました。ラウドネスは音量ですが、気持ちによって人間の言語音声の音量は非常に微妙に変わっていきます。音質も同じですね。全体的な音質の変化、悲しいときには悲しい声が出るわけですし、非常に微妙に変わっていきます。それから、そういう要素を分析的にと

らえるだけではありません。それぞれの要素は全体として効果を上げているわけです。全体としての効果ということからいえば、今度は考えられるのはスタイルのことですね。言葉のスタイル、言語のスタイル、それから、バラエティズ・オブ・イングリッシュ——スタイルもバラエティに入りますが、今度は地理的な、あるいは社会階層的な言葉の違い、いわゆる方言の違いを扱っております。この "FAMILY" の英語と、後半に出てきます。"The Ingenious Reporter" の英語と相当違ったところもあります。それから、鈴木先生の扱われた、"The Necklace" あるいはその前に扱われた入門編では、"People You Meet" これはBBCの英語学習用の番組ですが、これらはブリティッシュ・イングリッシュです。従って、いろんな英語が登場しますので、バラエティズ・オブ・イングリッシュということを経験しております。とにかく、英語の音声学的な面に興味を持っていただこう、そして、学習にもそれがプラスになるようにしようという意図から、6番目の PHONETICS Corner を入れてあります。

それから7番目、「ドラマのせりふの繰り返し練習」、いまご覧をいただきましたが、ここで初めて文字が登場いたします。そして、繰り返していわせることになります。本当は、2回は少なくとも繰り返していえるようにしたかったのですが、時間がとてもありませんで、結局1回になっております。文字表現を見せながら繰り返させる。確認でもあります。あいまいになっているところをはっきりさせるというねらいでもありますし、それから、学習者を安心させることでもあります。ただ、ここで本当は日本語訳も入れようかなと思いましたが、ディレクターの方ともいろいろ相談しまして、結局外すことにいたしまして、印刷教材の方に日本語訳は入れました。

表現を口に出して繰り返し練習するということは、当然プロダクションつ

まり、プロデュースする力に通ずることではありますが。もちろん、聞く力の養成にも直接つながっているわけです。ここでご覧いただいたような英米人による「リハーサル」風景となります。本当はプロの俳優を使いたかったのですが、必ずしもそうではなかったようでもあります。3分42秒の部分を、さらに少し狭めまして、ネイティブ・スピーカーズに演じてもらう。ディレクターの指示によって、あるときは速くなっていく、あるときは怒った声になるとか、そういう話し言葉の表情の変化というもの、それをぜひここでもって提示したいということもありましたので、このリハーサル風景を入れました。また言葉というのは、やはり話し手が動いて成立するわけです。言語行動というのは、単に音があるだけじゃなく、単に文字ではもちろんないわけですが、話し手の身体の動きと一緒にあった言葉、これが生きた言葉じゃないかと思いますが、そういうことからリハーサル風景をここに入れました。繰り返し練習したような英語からテレビドラマの英語への橋渡しというような意味でもリハーサル風景を入れたわけです。ただ、こちらの思うようにはなかなか動いていません。それに時間もかなり限らざるを得ませんでしたので、なかなか思うようにはいかなかったと思います。

そして、最後にもう1回ドラマの視聴です。これで通して見るものは3回ありますが、場面によっては、そうできなかったのがありますけれども、1回目と4回目はぴったり同じではなくて、2回目のときに、少し前後新しい部分も含ませてやる。3回目はさらに新しい部分を含ませていく、こういうこともできる限りやりました。ですから、毎回新鮮な見方で見られるということです。学生の興味を喚起するという意図もありまして、そういうことをやっております。

そして、「まとめ」です。まとめはごく簡単で、時間がなくなることも多

くて、ほとんど何もできなかったのでありますけれども、一応励ましの言葉を常に用意いたしました。実際に撮りますと、ほとんど時間がなくなって、何もできなかったということが何回もあります。しかしできる限り学生を励ます、本当に勉強している学生諸君を励ます、そういうことを常に心がけて番組をしめくくりました。

以上お話ししましたこの『英語Ⅰ』の私担当の番組の構成は、何も今回初めてこういう構成をとったわけではなく、実は先ほどお話したように、12年前からいろんな方々とお話し合いをしたりして、つくってはいろいろディスカッションがあり、それから実験番組でつくってまたディスカッションがありということで、そういうものを踏まえてこういう形になったということをつけ加えさせていただきたいと思います。

○司会

ありがとうございました。ここで、いま拝見いたしました番組から余り記憶が薄れないうちに、フロアーの方々からご質問ないしご忠告、ないし激励、おしかりをいただきたいと存じます。いかがでございましょう。……小川先生、大変突然のお願いを申し上げて失礼だったのでございますが、いままでのところで、全体の経緯でもよろしゅうございますし、あるいは國吉先生の番組、あるいは國吉先生の番組をつくられる思想についてでも、何かわれわれ後輩に対し、ご忠告をいただかせんでございましょうか。

○小川（大学英語教育学会名誉会長）

ご忠告という大それたことはとてもできませんし、勝手に飛び入りしたような形ですけれども、飛び入りさせられたので、その点では何でもいえるかと思うのですけれども、まあ人身御供というところです。國吉先生のごことは、私、よく前から存じ上げていまして、放送の趣旨も、実際に打ち出され

たものも、私は賛成でございまして、特にいうことはございません。

ただ、レジュメの中に、どうしてこういう表現が使われたのかと一つだけ朝から読んで気になっているところがあります。(2)のところに「学習の材料は出来るだけ生の、ほんものの英語を中心として扱う。」というのがありますが、本物の英語と、うそ物の英語はどういう英語なのか、(笑声)その区別が、標準的という言葉が盛んに使っていらっしゃるのですから、「標準的」でいいのじゃないかと思うのです。言葉というのは、原則的に通ずればいいのですから、うそ語でも通じた方がいいので、本物でも通じなければ仕方がないので、本物という言葉は非常に俗的になると思うのですけれども、まあそんなことを印象として受けました。

全体としては、どうして英・仏・独というふうに理屈なしに選んだかというのは、これは教えていただかないとわかりませんが、私は英語というのは突出番組として全部がやればいいんじゃないかと思うのです。言葉としては大変に穏やかでないのですけれども、日本では、英語はフォーリン・ランゲージとして扱っていますけれども、多くの国特に、植民地などでは、セカンド・ランゲージとっております。セカンド・ランゲージとフォーリン・ランゲージの区別が非常にむずかしいのですが、日本ではフォーリン・ランゲージですけれども、英語は一種のセカンド・ランゲージに近くなったものというふうに扱っていいんじゃないかと思うので、英・仏・独と、同等に並べるというのはおかしいのじゃないかと思うのです。(笑声)

私が英語やっているものですから、非常にいいにくいのですけれども、私は外語大学にしばらくいましたが、そこの学生を見ると、旧制中学でフランス語ばかりやってくるのは暁星なんですね。独協はドイツ語ばかりやってくるのです。一般の人は英語をやってくる。英語を5年間やってくるの

と、英語をやらないでフランス語を5年間、ドイツ語を5年間やってくるのが、外語に入りますと、1年間で平等になってしまうのですね。ですから、英語というものは、あらゆる外国語をやる基礎と考えていいんだらうと思うのです。だから、こういう並べ方ではなくて、セカンド・ランゲージ的に考えてもいいんじゃないか。外国語をやる基礎は、日本では現実問題として、学習する人の数も、養成した教師の数からしても、仏独と同等に扱えないのではないかというふうな気がするわけです。また、旧制高校でも同じだと思うのですね。ほとんど中学で英語だけやってきた者が、甲乙丙と別れてほかの言葉をやりますけれども、結局、1年たつと同じような力になってしまうということは、大変におもしろい現象だったというふうに思うのですけれども、そういうつまらないことを……。

それから、TVとラジオのことですけれども、私は、言語の放送としては、ラジオの方にやや軍配を上げるという気持ちで、それは、先ほどから申されたように、音声に重点を置くならば、やはりラジオの方がいいんじゃないか。TVで、目で見ていると、やはり耳の方はおろそかになりますから……。私は、田舎に育ちましたから、三味だとか琴だとか尺八などちょっと例がよくないのですけれども、音楽を専門とする先生というのはほとんど目の悪い人であった、という印象が非常に深いですね。結局、耳が聞こえなければ目の方が鋭くなり、目が見えない人は耳が非常に鋭くなる。全体的に人間はそういうふうに行っているんじゃないかと思うのです。TVを見ていると、耳の方はややおろそかになるんじゃないか、耳で聞いているだけよりは、というような気がいたします。TVというのは、どちらかというと、娯楽的な面が強いんじゃないかというような気がいたします、どちらも必要ですけれども。そこで、TVにはどういうものを出したらいいか。これは物を

見せなければわからないものがありますから、もう少し研究して、そういうものを整理なさらなければいけないのじゃないか。人ごとみたいにいいですけども、私も責任者ですけども、そんなことを感じます。

それから、45分というのは、午前の会議にも出てまいりましたけれども、長過ぎると思うのですね。アテンション・スパンというのは、30分が最長だと思うのです。中学生ですと、20分を過ぎますと注意力ががたっと落ちてくるのですね。45分間けというのは、よほどやり方を苦心しないと時間がむだになることが多いのじゃないかと思うのです。これは全体の時間割りですから、簡単にいきませんでしょうけれども……。

もう一つは、日本人というのは、二者択一的なものの考え方が強過ぎるんですね。実用か教養か音声か文字か、そういう二者択一的なA or Bという考え方は、言語では間違いだと思うのですね。言語はもっと生きた存在だと思うものですから、文字と音声、教養と実用、そういう二つのものがあるわけではないのに、教養のためにやるのか、実用のためにやるのか、英語というのは教養なのか実用なのか、そういう発問の仕方も、おかしいというふうに私は思うのです。"and"であって"or"じゃないというふうな感じがします。

そうすると、ちょっと長くなって申しわけないのですが、学習者の立場に立って考えれば、日本の英語教育に限らず、外国語教育は音読だと思うのです。やはり内容を豊かにしなければいけない。内容を豊かにするためには、やはり本を読むことだと思うのです。文字と音声をむすびつけるものは音読だと思うのです。昔からそれはいわれているのですから、もっと音読を奨励するようなことをテレビ、ラジオの番組でもやってもらえばありがたいというふうに思います。

それから、言葉というのは、そんなふうに、はっきり段階的に区別できるものではありません。歴史でも日本の歴史とか東洋史とか世界史、などど別々にやりましたけれども、英語にはそういうことはないのです。ご承知のとおり、指導要領というのが中・高ではありますけれども、何と書いてあるかという、具体的なのは中学だけです。高等学校の方を見ますと、そのやや進んだ形となっています。新しいものは出てこないで中学でやったことを深めているだけなんですね。そういうことから考えても、語学の学習も余り機械的に区別するのは意味ないと思うのです。

それから、これは、一般的な印象的な誤解なんですけれども、きょう天城先生ともお話したのですけれども、話すとき、どうも日本人は英語が話せないなんということをいいますけれども、話すのはだれでもできるのです。内容さえあれば。そして向こうもわかってくれるのです。聞くことがわからない。しかも、いまの英語というのは国際語になっていますから、世界じゅうの者が英語でいろんなことをいいますね。向こうのいうことがわからない。向こうのいうことがわかるということが一番大事なことで、それをもっと強化するような訓練の仕方があるんじゃないかというふうに思いますね。

たとえば、私は日本語を少し話しますが、（笑声）、日本じゅうどこへ行っても小川芳男の日本語しか話されていないなんてことはないですね。ところが、九州に行ったり、青森に行ったりいたしますと、彼らは彼らの日本語を話しますけれども、時にわからないことがあっても、大体分ります。それはわかることが望ましいのであって、私の話す日本語が九州へ行ったからといって九州的に変わるわけでもなくて、いつでも私の日本語しか話せないわけです。大阪に行ったから、「あきまへん」といってるわけじゃないのですが、私の日本語でわかるわけです。向こうのいうことはわからないのが時に

あるのですね。教養を積んでいないというか、教育の進んでいない人はそういうことがありますから……。話すということよりも聞くことの方がむずかしい。若い人はそう思わないのですね。「どうも英語が話せません……。」
「冗談じゃない、君、聞けるのか」というと、「全然わからない」と言う。
(笑声) そういうつまらない話です。恐縮です。

最後に、お金があるのかどうか知りませんが、(笑声) あるならば、中国語専門の方では、ご存じの人も多いかと思うのですが、『官話急就篇』というのが昔からありまして、いまでも使われているのですね。それはことわざのようなものとか、昔からの美文だとか音調のいい詩の一部分が載っているのです。音声を覚えると同時に、内容豊かな、あるいは中国の古典が自分の身になるというものです。また昔は高等教員の試験に英語がございまして、指定参考書というものがございましたが、そういう名文集や指定参考書のようなものをおつくりになったらいいんじゃないかと思うのですね。
われわれは一々監督はなかなかできないのですから、これだけは読めなければだめだという、自分で読むような本を出す。それから、外語大では、私は入った途端に、卒業までに一万語を覚えなければだめだし、一万語の表を渡しました。これを4年間に覚えて出ろということをやりましたが、そういうものがつくられてもいいんじゃないかと思うのです。放送大学ともあろうものが——あろうものかというのはちょっと失礼ですけど、(笑声) とにかく、旗を振って、新しい放送大学ができたんですから、放送大学にふさわしい教え方なり、あるいはテキストだとか、細かいといいますが、大きなといいますが、方針ができ上っていいんじゃないか。そういうプロジェクト・チームをつくらなければいけないんじゃないかと思うのですね。いま話を伺っていても、ただやっているだけですからね。(笑声) 私も責任者です

けども。(拍手)大変失礼しました。辻さん、どうも、申しわけないです。

○司会

どうもありがとうございました。大変強烈なおしかりもいただきまして、全く、ただやっているだけなんでございます。(笑声)ありがとうございました。

ほかに、小川先生のいまの痛烈なご意見に誘われて、何かご意見ございませんでしょうか。この際できるだけ承っておきたいと存じますが。

それでは、時間がございますので、フランス語の方の、これも、ただやっているだけというおしかりを受けるといけませんが……。

○福井

プロジェクト・チームをつくらせてくれといっても、なかなかそれまでのお金をいただけないのでございます。

○司会

これを機会にいただこうと思っておりますが、(笑声)小川先生のご激励もいただきましたので、天城先生、ひとつよろしく願いいたします。(笑声)

○天城(放送教育開発センター所長)

お金はあります。(笑声)

[ビデオ映写]

○司会

今の番組、割合あっさりさよならされたような気がいたしますけれども、福井先生、簡単なコメントをおつけくださいませんか。

○福井

まず最初にお断りしておかなければならないのは、11課には身ぶり言語の場面がございませんでしたので、ほかのところからとってきましたので、服装が違っております。ですから、しょっちゅう服装を途中で変えてやっているわけではございません。（笑声）

二つ目には、なるべくたくさんフランス語を使っているところを出そうとしたものですから、全然解説しなくて、おわかりにならないで腹立たしく思われた方もあるかと存じますけれども、一応は解説しております。ただし、思うほどは解説しておりません。ですから、たとえば最初のアニメの方の物語、妖精たちが自然破壊がひどいので人間世界に介入してくるというような話もございますけれども、妖精たちのそういった話について、細かい説明、意味、一つ一つの言葉に対して説明はしておりません。印刷教材でやっております。そうしないと、45分では、どうにも時間がなくてできません。印刷教材で意味をとって知ってから、今度は絵を見て、その中の音声が、ああ、あれに対応するのか、日本語でこういうときにこんなことをいっているな、ミュゼ・ド・クリニーとかいっているな、あれはクリニー博物館のことかと、そういったことだけわかってくれればいい。要するに、聞き取りともいいますが、ただグローバルな理解をしていただければそれでいいという立場であのアニメを見せております。その中の一部だけを引き取って、それだけを文法的にも、あるいは表現としても知ってほしいというところで、基礎表現の練習をしております。

そういった形で、なるべくみんなわかるように、しかし、わかるようにといっても、少しは勉強しなければわからない程度につくってあります。それでも最後のところになると、かなりむずかしい表現が出てきます。1回未来

形をやったからといって、フランス語の未来形を覚えるようになるとは、これはどこの大学でもそんなことはあり得ないと思っておりますので、ですから、そういったもののドリル、たとえば、ちょうど小川先生がいみじくもおっしゃったように、指定参考書ですか、長々とやったあの細かく書いた、説明して練習もくっついたものでもやらないといけないと思っております。本当は、15回プラス・ラジオがございますが、30回で、ある程度の入門——確かに話すということは機会がなければできないし、またそれは必要はないということは、私も賛成でございます。やはり聞くことが先決であるとすれば、カセットなんかも彼らがとって、そして reproduction、再生できる能力だけを養成しておくということが、こういった遠隔教育では可能なんだろうと思っております。

最後に、先ほどの小川先生のお言葉にコメントをつけさせていただきますけど、確かに私も英・独・仏と一緒に扱って、一緒の場面でやるのはおかしいと思っております。だから、たとえば大学なんかでは、英語は必修から外しちゃって、独・仏だけ必修で8時間やっちまってくれた方が、はるかに能率的です。(笑声) 学生たちはどうせ英語をやるんだから、そうしてくれればいいというふうに思っております。(笑声)

○司会

どうもありがとうございました。聞きようによっては暴論にも……。 (笑声) ここでお断り申し上げておきますけれども、英・独・仏がこのシンポジウムで取り上げられましたのは、英・独・仏のみがテレビを扱っているからでございまして、われわれの方では、スペイン語、ロシア語、中国語、これらは皆ラジオの4単位科目となっております。なぜそうなったのかという小川先生の先ほどのご指摘でございますが、私、そうなったところに採られ

たものでございますから、ちょっとよくわかりません。わかりませんというよりも、全くの常識に従ったものであり、先生ご指摘のようないろいろな矛盾がそこにはあります。前の職場でございました東京大学の教養学部でも、いま福井先生がおっしゃったのは必ずしも暴論ではございませんで、英語を外国語という範疇から外してしまい、人文科目の一つにしてしまった方がいいんじゃないかという意見は、特に独・仏語において盛んでございました。

それから、われわれ英語に他の外国語を扱う者は、非常に負っているわけでございます。要するに、どんなものが出てきましても、英語の例を取り上げれば大体学生はわかってくれるわけでございますが、それと同時に、中学校からの英語の教育の中で——これはまことにいたし方ないことで、この功罪はまた本当に社会的に論じないといけないだろうと存じますけれども——単語の訳から文章をわかろうとする、つまりあの奇妙な分析能力に頼り、もっぱら単語の訳からすべてを理解しようとする癖がつけられ、かなり成長した学生を扱おうとしている独・仏語の教師はこれに悩まされるということがあり、英語でつけられたこの悪い癖ごと、これは本当に暴論でございますけれども——私たちは学生を受けとらなければなりません。（笑声）

それからもう一つ。われわれ仏・独語の場合には、仏・独の文化が日本の文化と違うということを非常に意識的に主張いたしまして、文化の違いから中に入ろうとする、あるいは、相手の文化を非常に対象的な客体物として一応は取り出してみる、ということをしたがるわけですが、その際に、英語のようにやればいいんだらうという学生の感覚がありまして、先ほど小川先生がおっしゃったとおりに、セカンド・ランゲージとしての英語というものが小さいときから一応入っておりますために、相手の文化を他者として——他

者というのはまたまさにドイツ語の訳語でございますが——他のもの、異物として扱うという姿勢を欠く、それがまた英語のわれわれにもたらす害悪であるという、これまた第二の暴論があつたりもいたします。

本当に後の二つは暴論でございますけれども、そういう関連があるということは指摘できるだろうと思います。それでは小川先生、もう一度お言葉をいただきます。

○小川

大変勝手なのですが、私、後の会がございますので中座いたしますので、その前に一言だけ、暴論にさらに暴論を重ねるわけですが、言い落しましたが、私は、もし決めるのならば、英語と中国語とロシア語だと思うのです。日本にとって、これぐらい大事な国はないと思うのですね。だから、英・仏・独というのはそれにちょっどこだわるわけなんです。福井先生の言葉にもかかわらず、もしそういうことならば、英語とフランス語だと思うのです。

ヨーロッパなり世界を旅行しますと、私の非常に狭い経験では、ラテン系の言葉は非常に多いです。どこの国にもラテン系の言葉、ロマンス系の世の中は多いと思うのですね。ドイツ語は英語とよく似ていますから、大変司会者に申しわけないのでございますけれども、英語とフランス語の方がいいんじゃないかというような気がするわけなんです。私、イタリアへ、イタリア語できないうちに行きましたところが、なかなか通じないで、英語なんかでは通じませんですね。町の人には。そうしたら、君はスペイン語を話すかという人が多いのですね。スペイン語ならばラテン系統だからややわかるんじゃないかと思うんですが、そんなことを思いまして、英語の次にフランス語に手を挙げます。

もう一つ、最後ですけれども、いまのロシア語と中国語と英語というような観点から見れば、やはり東南アジアとか、日本と関係の深い、しかも日本でやっていない言葉をラジオあたり、あるいは放送大学で取り上げるということは意義があるんじゃないかと思うのです。人がやっていることをただ漠然とくっついていったのじゃしょうがないという暴論で、これは申しわけないのですけれども……。

○司会

司会者として私、決して暴論とは存じておりません。放送大学はドイツ語をやめろと、言われればおそらく私も賛成するだろうと思います。（笑声）

○阿部（放送教育開発センター教授）

いまのお話につきまして、なぜ英・独・仏にしたかということの、私ども辻先生とご相談申し上げまして決めました理由は、いま辻先生がおっしゃいましたように、これをテレビで取り上げたからという理由でございますが、そのテレビで取り上げたという理由のもう一つ背後にございますのは、いまこれから放送大学がこういうことをやってまいりますときに、恐らく教官だけではだめだろう、その場合にはテレビで取り上げるとことのチームワークということが基本でございますので、そういう点では、ラジオと体質的に違う場面がある、そういうことで、ディレクターの方々のご参加もいただき、そして、それが一つのより広い幅での新しい方向での語学の取り上げ方ということになれば、そして、そういう研究体制を組むようなきっかけになればということで取り上げたということでございますので、決してその価値を取り上げて英・独・仏にしたわけではございませんので、その点はご了承いただきたいと思います。

○小川

どうも申しわけございません。（退席）

○司会

フロアーの方からご意見ございませんでしょうか。お願いいたします。

○宇佐美（NHK放送文化調査研究所）

國吉先生にお伺いしたいと思います。多分、先生は、いろいろこれまで英語の教育を実地に教室でやっていらして、いろいろな機械や映画を使ったりビデオを使ってやっていらしたと思いますが、放送大学にいらっしゃって、ディレクターとか、あるいは技術とか、あるいは資料を探す人たちの協力を得てこういうものをおつくりになってみて、お一人で教室でやっていらしたときと、それから、ディレクターの協力を得てこういうものをやってみたときと、どういうふうに教えてみての感覚というのが違うか、それからまた、こういうメディアを使ってカリキュラムをつくっていくときに、教室のカリキュラムとどういうふうに違ってきたのか、その辺のことをお伺いしたいと思います。

○國吉

一人でやっている授業と、それから、『英語Ⅰ』を作成するにあたっての違い、これは非常に大きな違いだと思いますね。

まず第一に、たった45分、正味43分の番組をつくるためにどれくらいエネルギーを使っているかわからないといってもいいかもしれません。45分のその番組をつくるのに、その何倍でしょうかね、準備のためには、3倍でもきかない、4倍、5倍、もっとかかっているかもしれませんね。これは大変な努力だと思います。

したがって、番組はある意味で結晶みたいな形になっていると思います

ね。非常にコンデンスされた形になっていると思います。ですから、受ける側、学生の方からしますと、かなり知的に大きな負担になるかもしれませんね。かりに、小川先生のお話の中にもありましたけれども、45分を詰めてじっと本当に勉強するつもりでやりますと、それは恐らく、私の大学でやっている授業1時間の2倍は少なくとも疲れるかもしれないと思います。しかし、担当した者として、やはり番組をつくってみて、これくらいよく準備して、そして盛り込んでやれば効果は上がるのではないかという期待を非常に持ちます、つくった側として。これは普通の授業でもこれくらい準備したらいいんじゃないかなと思いますけどね。（笑声）

また、これは余談になりますが、この『英語Ⅰ』を作成するに当っては、本務の仕事をしながらやっております。そのせいもあるかもしれませんが、非常に負担に感じたのは。やはり放送大学ですから、そしてまた、その大きな影響力を考えるならば、全く専任の形で、そして、それこそ辻先生、何回もご発言されていますし、福井先生もご発言されていますが、チームの力、共同でこれを開発する。これは英語の教師1人でなくて、数名で一つの番組をつくるのに参加し、それだけではなくて、当然のことながら、ディレクターの方々、そのほか特に学習心理学関係の方とか、あるいは教育工学関係の専門家とか、関連のそういう方々全体のチームをつくって、できるだけいいものをつくるべきじゃないかと私は考えております。ですから、できたものについては、一応エネルギーを費やしてつくったのですから、満足はしていますけれども、まだまだ足りないものがたくさんあるんじゃないかと心配しております。

○司会

ありがとうございました。よろしゅうございましょうか——小川先生がお

立ちになってしまった後で、こういうことを申し上げるとフェアでないので
ごさいますけれども、私、司会者の立場として、ドイツ語を擁護するという
意味ではなく、事実だけをちょっと申し上げておきますが、ドイツ語が使わ
れている範囲は、ヨーロッパの中で、東西ドイツ、オーストリア、それから
スイスの大部分、小さい国を数え上げますと、ルクセンブルク、リヒテンシ
ュタインなどという豆つぶみたいなところに参りまして、もう一つ、これは
日本人が余り旅行しないので目立たないし、また、ロシア語をやっていれば
それにかえられるわけですが、外国語の効用という面からだけ申し上げます
と、東欧圏ではドイツ語というのが不思議なことに、ずいぶん重要なコミュ
ニケーションの用語となっており、ソビエトでもそうなんですけれども、東
欧諸国の国際語はほとんどドイツ語に偏っているのだということだけ、ちょ
っとつけ足して申し上げておきます。（笑声）

それでは、本当はここでわれわれ教師群に対する青柳ディレクター、長谷
川ディレクターの痛烈な攻撃を承りたいのですけれども、ちょっとそれは後
にさせていただきますして、ドイツ語の方の番組、これこそなんとなくつくっ
ているんじゃないかという気がなんとなくいたしておりますが、それをお見
せしたいと存じます。

[ビデオ映写]

○司会

以上のようなわけでごさいまして、風景とか、いろいろなものを見ていた
だくのは結構なのですが、あれで勉強できるのかしらと、つくってる方が四
六時中恐怖心に襲われております。

お手もとにございます刷り物に、たとえばテレビの第7回がどういう構成になっているかというのを、一応書かせていただいております。非常に大ざっぱにいってしまいますと——こういう言葉が妥当かどうか存じませんが、中山純さんの方から拝借いたした言葉を使います——テレビそのものの中にあります、object text と申しますか、ドイツそのものの風景を利用したものと、言葉を教えるということのためにつくられている instrumental text というものの度合、ないしは組み合わせから全体ができておりまして、この全体の構築に役立っておりますのは、ことし7月の1日から20日まで、長谷川さんを交えた6、7人でドイツ現地でのロケをさせていただきましたことで、そこで撮りました状況というものがふんだんに入れ込まれているわけでございます。

それは一つには、ドイツ語で Landeskunde と呼ばれるもののございまして、やはりその土地のことがわからなければ言葉を使っても意味がないという考えが、かなり強いものでございますから、それに影響されているということもあります。

それからまた、こういう配慮も多少ございます。言葉を習うということが非常に苦痛である場合もあるだろう、その際に、ドイツの風景、ドイツでの生活状況、あるいはドイツ人のしぐさ、ドイツ人の服装、それらに対してある程度の見方というものをテレビを通じて視聴者に与えることができるならば、それもまたばかにならないであろう。元来そうした情報というものがあって、その上に言葉の情報が乗るべきであるという考え方にのっとりまして、つくられているものでございます。

たとえば、いまご覧いただきました——ベルリンも多少出てまいりましたが——ローテンブルクの風景などは、そのままで全くの object text でござ

いますが、ブティックはデュッセルドルフで撮りましたもので、あれだけ撮るのに半日かかったという話を——私と長谷川さんはそのときちょっといなかったんですが——聞きました。

あれの中に出てくる人物は、やはり多少あらかじめ頼んでありまして、全くの authentic なものではございません。全くの authentic な状況の撮影もあったわけですが、それをお見せしても、音響がすごく悪くてわけがわかりません。そんなわけでいまのはマネキンさんであった女子学生に頼みまして、買い物客の役をしてもらい、ナターシャという、デュッセルドルフの一番高級なブティックの一つでございすけれども、そこで買い物をしてもらいました。8万円もするものをさっと買ってすっと帰るなんてドイツ人は実際にはほとんどいないのでございまして、（笑声）彼らはものすごくけちくさく、3日4日考えなければとうてい買いはしないだろうと思います。

ただし、8万円もするものでもさっと袋の中へ入れ込んで、きれいに畳みこんだり包装したりは、全然しないところが、ドイツでございすし、また、つり銭を渡す時に引き算は決していたしませんで、——引き算はできないというのが、大体外国の通例だと思いますが——全部足し算で引き算のかわりをしている状況とか、そういうところはかなり authentic なものと通じているだろうと思います。

以上のようなわけでございまして、大体向こうの様子をそのまま見せるもの、つまりそれに全く手を加えないものと、語学の教材のために、大きく手を加えているもの、その分量を一応考えてみまして、まあいずれも100%ということはある得ないと思いますけれども——なぜなら、ある状況を写す、つまり切り出すということだけでも対象は100%そのままのものでは

なくなるわけですから——しかしまあ全く100%に近いものから、われわれの方で語学教材のためにのみ人工的に組み立てているという100%人工的なもの、その間を四六時中行ったり来たりしているわけでございます。ドイツ語の場合には、できるだけ向こうのあるがままの情景を視聴者にお見せするということに主眼が置かれておりまして、やはり言葉の教育としては、聞き取りにくい authentic な状況もかなりあるというのが現状だと存じます。

以上の立場に立ちましてご質問を受けたいと存じますが、何かございませんでしょうか。

○篠部（国際基督教大学）

担当が社会科学の関係でございますので、素人ではございますが、午前中のセッションからの続きで大変恐縮でございますけれども、放送教育の方法のことでちょっと伺いたいと思います。

午前中のときには、questionnaire というので大分ひんばんにフィードバックがあった。それから、最後に試験ということがあったわけでございますが、この語学番組の中で試験、成績、あるいは単位というようなことを考える場合、そのフィードバックはどういうふうになるんだろうかなと思いましたので、参考までにお教えいただきたいと思います。

○司会

私1人が専任でございますので、お答えしたいと思います。

午前中の寺脇先生の questionnaire によるご研究は、普通放送大学で行われます講義に対して、こういうことが行われるというものではございません。ああいう questionnaire を出した場合にどういうことが生じるかということ、特別に試してやっていただいたものでございます。ですから、放

送大学の一般の授業にそれが行なわれるわけではございません。

放送大学の授業といたしましては、非常に淋しいわけですが、8回目を終えた辺までで、要するに15週のうちの途中でもって、通信指導というのが行なわれます。この通信指導と申しますものが大体試験の形になっておりまして、これも先ほど矢部先生がおっしゃいましたが、分野によって択一式と記述式との両方がございますけれども、語学の場合には恐らく択一式が多いと思います。特に英語の場合には、記述式で採点するということは、数の上からほとんど不可能であろうと存じます。択一式の試験でもって通信指導というのが行なわれまして、これに対してコメントつきで答えが返ります。で、どのくらいできているかということが、個々の学生にわかるわけでございます。

あとは、15週を終えましたところで各学習センターで単位試験が行なわれるということになっております。一つの課目を考えると、それだけですべてなのでございますが、英語の場合でもフランス語の場合でもドイツ語の場合でも、面接授業というのが片方で行われており、これはそれぞれの科目に対して必須ではございませんけれども、全体としては面接授業を何単位かとらなければならないことになっており、英・仏・独とも面接授業の初歩が——初歩といいますと語弊がありますが——いまお見せした授業に関しましては、そのそれぞれに対応している面接授業が開設されております。その面接授業は、15週のうちに5回学生が出席するということで成立しております。

ですから、questionnaire として四六時中アフターケア、ないしは同時のケアかもしれませんが、それが行なわれているということには、残念ながらなりません。

ほかに、ご質問、いかがでございましょうか……。

それでは、お休みをとるよりも、少し早目に終了した方がいいかとも存じますので、青柳さん、それから長谷川さんの方から、番組制作の中で——要するに制作上のご苦労というのを承るよりも、その中の一つかと存じますけれども、われわれの考えていることをいかに技術面に伝えるのに苦労なさったかということも含めて、ちょっとお話を承りたいと思います。

青柳さん、いかがでございますか。

○青柳（放送大学ディレクター）

直ちにはご質問の答えが思い浮かばないんですけれども、たまたま大学の外国語教育の先生方と一緒に仕事をするということになりまして、いままで私は高校とか中学の言語教育関連の番組づくりをやってきましたんですが、大学の言語教育において何をするかということについては、かなりの部分が各先生方の自由裁量に任されているんですね。ですから、ドイツ語であろうと英語であろうとフランス語であろうと、言葉を教えるためのどういうシステムをつくるかということがかなり重要な部分を占めるのじゃないかと思うんですね。

特に、放送大学というのは放送を使って大学教育を行うということなんで、それについてのノウハウを必ずつくらなければいけないんだという気がしています。いまようやく番組の一つの方向とテキスト——いわゆる印刷教材とっていますけれども——がスタートした所なんです。

私、今年度は『フランス語Ⅰ』を担当したんですけれどもフランス語は正直いってあまりできないんです。放送のアニメーションなんかは恐らく20回ぐらい聞いているんですがね。20回ぐらい聞いても、必ずしも全部マスターできない。出てくるフランス語をほとんど覚えてしまうことは確かなん

ですけれども。ですから、TVのフランス語を生徒さんが自分のものとして活用出来るようになるためには、単に放送を数回視聴するだけではいけないのではないかという気が、自分の経験から、ちょっとしているんですね。

すなわち、フランス語をコミュニケーションの道具として運用出来るようになるには放送だけではいけない、それから、印刷教材だけでもできないといえるのではないか。それを解決するには、学習センターなどに、いまはコンピューター時代ですので、そういう機器を使って、各自が放送と印刷教材で学んだことを身につけ、運用できる教材というものをそこに置いて、必要に応じて生徒が利用できるシステムにならなければいけないだろう、そういう形になっていくことによって、放送大学の言語教育のシステムが結実するんだろうと思うのです。

それから、各言語の教育のソフトウェアがどうあるべきかということについては、先生方もまだ決まっていらっしゃらないとおっしゃっているので、私どもが、こうやるべきだというような問題じゃないと思うんですけれども、（笑声）いずれにしろ、言語教育のソフトウェアについてはオープン・ユニバーシティのコースチームの考え方を取り入れた様な方法で、世の中のいろいろの知見だとか知識を取り入れてやっていくということが必要になるだろうと個人的には考えております。放送大学も行く行くは全国的に広がっていくというようなことを考えますと、いまは実験段階の第二段階目というくらいでございますが、将来は言語教育のより綿密なシステム化というものが必要になってくるだろうと思います。今のところはそんなようなことを考えているだけなんですけれども……。

○司会

ありがとうございました。長谷川さん、いかがでございますか。

○長谷川（放送大学ディレクター）

ぼくも青柳さんとダブるところがあるかもしれません。いまの私の実感からいいますと、辻先生が何度かおっしゃっていました authentic なもの、あるいはそれを目指しているという、ある意味で高い理念というものには大変賛成するわけですが、ドイツ語はいままさに制作真最中で、その現実を考えますとどうも大変な綱渡りで、高い理念と日ごろの綱渡りのギャップを大変痛感するわけです。

ドイツ語は、これまたさっき辻先生が触れられましたように、この夏いろいろな方のご協力をいただいてドイツで取材をやってまいりましたのですが、言葉の勉強の放送教材をつくるということからいえば、ここへ行けば恐らくこういうきれいな町があるよ、何かこういうものがあるよということもさることながら、じゃあそれにはどういう言葉なり文法なりが当てはまるだろうかということ、全体像としてつくり上げてから、取材に取り組むべきだったのであって、結果論ならだれでもいえると怒られちゃうんですが、やっぱりちょっと、俗な言葉でいえば行って撮ってきた……。これにどういうふうな言葉をぶつけようか、文法事項が当てはまるだろうかという、やや後追いふうの番組制作をやっている。でき上がったものは、われわれなりに大変努力をしたその成果はでてくるとは思うんですが、本当は、もう一度プランニングをしっかりとやるべきだったのではないかと思います。

そのドイツ語の取材に行った例が、これまたほかの教科の放送教材の制作にも当てはまるのではないかと。これは青柳さんも触れられたことですが、外国語一つ一つの番組の全体像といいたし、この放送教材はかくあるべしというところから、じゃあどういう放送教材がよいのか。45分で15回しかございませんので、小川先生からは、45分では長過ぎるという

ご指摘がありましたし、15回では足りないというのもこれまた事実かもしれませんし、その辺を考えると、これを突き崩すという努力も一方では必要かもしれませんけれども、そういう枠の中でいきますと、もったいないというか、残念なところだったということでございます。

もう一つつけ加えますと、ラジオとテレビの関連というところですよ。たまたまドイツ語の場合、辻先生と相談いたしまして意図的にラジオとテレビの関連をつけようではないかというところから、テレビではちょっとご覧いただきましたように、主として、言葉でいうと、presentationということになりましょうか、そういったことを意図しております。それを、ちょっとしたプラクティスまでは入りますけれども、45分という長丁場ですので、放送教材としてはややゆったり目につくっている部分もございます。

そして、ラジオでは集中的にプラクティスをし、それを発展させていこうという考え方で、これはある程度、成功しているといえるかどうか、これはまた辻先生からお言葉をいただくとしましても、その辺はずいぶん意識してやっている。これはNHKの外国語の番組ではできなかったところを、ちょっといま突っついていっているのではないかと考えています。

ただ、非常に突き詰めたところまではまだ行っていないので、その辺を含めまして、先生方はじめ、大学、それから、開発センターの方々にぜひ研究いただきたいところでございます。

○司会

ありがとうございます。何を申し上げるにしても、どっかからお金を出せというように聞こえなくも……。福井先生、国吉先生、いかがでございましょう。

○福井

ちょっとお伺いします。長谷川さん、外国語教育はかくあるべしと全体的に決められたら、われわれは動きがとれない。

○長谷川

いえ、一つ一つの言語という意味です。

○福井

はい、それなら文句ございません。

○長谷川

その間にまたディスカッションは必要だろうということで、ちょっと言葉が足りませんでしたけれども、差し出がましいことを申しまして失礼いたしました。

○福井

いいえ、とんでもございません。それと、やはりコースチームをつくってやらなければいけないだろうとは私も思っております。

○司会

福井先生が前からよくおっしゃっておられるのは、研究会とかそういうものはあってしかるべきだが、一つの規範的な様式——要するに言語というものは非常に広くて、種々にさまざまな需要があるわけですから、それに対して、放送大学の15回、30回、あるいは何百回であろうと、それが一つの規範的な動きを示すことなどはどうていできない、われわれはただ、ある一つの非常に考え抜いた試行錯誤の一例を出すにとどまるのであるから、その分際をよくわきまえて研究に入れということで、これが福井先生のご主張だと存じます。

國吉先生、いかがでございましょう。

○國吉

小川先生いらっしゃらないんですけれども、「ほんものの英語」とレジュメへ書いたのを指摘されましたので、ちょっとお断りしておきたいと思います。実は私は全く authentic というつもりで書いたつもりなんです。一般的に日本の英語教育では、特に学校の英語教育では余りにも、温室育ちの英語といいましょうか、あるいは培養器の中で育ったような英語だけが教えられているように思います。学習のために特別にスピードも遅くして、アーティキュレーションや発音もきれいにして、スタジオで録音しますから雑音も全くない。そういう非常にきれいな形の言語材料を聞かせるということがごく普通です。

これはなるほど入門期のごく最初のところであれば結構でしょうけれども、中学校2年生や3年生になっても、いや、高校1年生になっても2年生になっても3年生になっても、大学1年生になっても2年生になっても、つまり教養の英語教育でも、あたりまえの普通の英語があらわれないという結果になっています。このためにいろいろありますけれども、非常に有能な方が学校での英語教育を受けて外国で勉強されたり、外国へ出て活躍される段になって、はっと思って、大変戸惑う。これは大変な損失ではないかと思うんですね。

そして、やはり英語教育ですから、人間の言葉を対象としなければいけない。そうすると、もっと早く、中学校2年生、3年生でもいいでしょうし、もちろん高校だったらそうですし、まして大学の、特に放送大学のこういう番組でしたら、辻先生がおっしゃる authentic なマテリアルをやはり材料にしなければいけないんじゃないかと思います。英語の場合には、中学校3年、高校3年は少なくともやってきているということを前提にしているわけなんですから——もしそれを前提にしないのならば入門編をつくらなければ

いけないと思いますが——そういうことで考えなければいけないんじゃないかと思って「ほんものの英語」という言葉を使いました。言葉はまずかったかもしれませんが、そういう意味でありました。

もう一つ、『英語Ⅰ』の場合にはテレビだけを使いましたが、当然テレビとラジオを組み合わせて使うというのはより理想的であるかもしれません。先ほど申しました47年、8年、9年ぐらいのときに数名の人たちが集まって話し合ったときにも、そうはもうすぐ意見が出まして、現にラジオの番組もつくってみております。

ところで、テレビは映像でありまして、映像は音だけよりもずっと多くの可能性を持っているわけです。私ここに書きましたように、もし映像が邪魔であれば、その映像を消して使うことはできるわけです。このことはたしかテレビ朝日で実験番組を出したときに提案しまして、やろうとしましたら、ディレクターの方から、困る、と……。そうしますと、放送機が壊れているのかどうか分からないというような……（笑い）そうなんですか。素人にはよくわかりませんが。じゃあ、じっと聞いてもらうために何か工夫をしましょうということで、何でもいから小さく画を出しておけばいいんでしょうということで、ロダンの〈考える人〉の写真を小さく出していただくことにしました。

そんなことで、映像というのは、特にテレビの場合には音だけのラジオと比べたらはるかにいろんなことができると思うんですね、もし時間が十分にあれば、音声的な訓練、聴覚だけに集中させて訓練する場面もぜひ入れたいと思いましたが、残念ながらそういう時間はとても入れることができませんでした。可能性は、テレビの方がはるかにあるんじゃないかと思います。

特に、ここに書いておきましたように、生きた言語としての英語を対象に

しようとするのであれば映像は不可欠だということでは、鈴木先生とも一致しております。

○司会

ありがとうございました。ほかにご質問はございませんでしょうか。

もしないようでしたら、私、ちょっとここでまとめさせていただきます。このまとめ方自身が少し強引であることは十分自覚しておりますが、一番最初に申し上げましたとおり、やはりわれわれ、無意識的にはありますけれども、authentic ということを望んで、それを指向しながらこの番組をつくってきたということは、一応主張できるのではないかと考えているわけでございます。

そうしますと、どうしてこういうふうにアニメを使い——これは裏話でございますが、フランス語の攻撃ではございませんけれど、『フランス語』でアニメをお使いになったのと『ドイツ語』でロケに行きましたのと、お金はアニメの方がかかったそうでございます（笑声）——TVドラマを使い、あるいはあちらの風景、状況をたくさん使っても、いずれにしても authentic だということは、これが一つの理念であることを示しておりまして、先ほどもちょっと申し上げましたとおり、どういう意味で authentic なことをねらうかどうかということもさまざまでございますし、また、authentic である度合いそのものもさまざまであると存じます。

しかし、どうして authentic ということを自然にねらうようになったか、ということを私なりに想像いたしますと、まず何といたしましても、活字ないしは音声のみの情報というものから、テレビの視聴覚という情報に移りまして、これが非常に大きな変化であるということです。提供できる情報量が飛躍的に増大いたしまして、この情報量を視聴者の方がはっきりつかまえ

ることが不可能なくらいだと思います。

これは一方で非常に注意を要することです、活字ないしは音声——午前中においでの方はお気づきになったかもしれませんが、先ほど寺脇先生が最初にご自分のプロジェクトのご説明を、そのオーバーヘッド・プロジェクターを使って画面にお出しになりましたけれども、耳で聞いているのと、それにオーバーヘッド・プロジェクターを重ねて見るのとでは、どちらの方がうまく理解できるか、われわれを動物実験の種にしてここで実験しておいていただけるとありがたいな、と思ったくらいでした。つまり、耳で聞いている上に、オーバーヘッド・プロジェクターで映し出したりなされると、ものによってはわかりにくくなるものもかなりある、と少なくとも私は感じておりました。

われわれが音声ないしは活字のみでものを受け取りますときには、かつての古い学生がみんなそうでございましたが、非常に誤解も含んでおりますけれども、全体を理解するための枠組みみたいなもの、あるいは想像力といってもよろしいかと思いますが、それが非常に活発に刺激される、要するに情報が足らないので、それを補うために自分が空想力、想像力によって、ある枠組みをつくり上げていこうとする力が生まれ、これが涵養されていくわけでございます。

これは外国語の学習の際にももちろん非常に強く出てくるわけですし、その空想能力・想像能力、あるいは枠組みづくりの能力というものが、あらゆる科目に通じる一つの高度な知的能力として涵養されてきたという事実の重みは非常に大きいと思います。この想像力は非常に多くの誤解を含んではいたけれども、ある個人の理解力の枠組みをつくる上では、非常に重要だったのです。

ところが、情報が非常に多い、テレビのようなものを見ますと、溢れる情報をどう処理するかということに視聴者の方があたふたいたしまして、自分の枠組みでその情報をまとめることができないままになり、それが自然にある種の知的受動性を作りあげるということは、今後のテレビのことを考えますときに、テレビの情報量が非常にすぐれたもので、非常に多重であるということとの関連の下で、非常に重要な問題だと思います。少ない情報の方がわれわれの脳髓を活発にできるのだ、という要素もあるのだということを忘れないで、テレビに取り組んでいかないといけないと思っているわけでございます。

そういういろいろなことを考えまして、この情報量をどうやって生かすかということには、どうしても authentic という理念が、目から見ても耳から聞いても、またほとんど匂いさえも感ずるような調子で全体を見るようになるという点で、自然に働き出してくると思います。

第二番目に國吉先生がご指摘になったことでございますが、日本国内でいままでの日本の外国語教育という——これこそまた理解のための枠組みができ上ってしまっておまりして、いつでも外国語教育をしようとするならば、その枠組みなしでは不可能なのでございます。つまり、いままででき上っている枠組みと、われわれが常につくりつつある枠組みとによって枠が非常に強固なものになってしまっている、外国語教育——この外国語教育の枠組みを崩したいという欲求が、どこか私たちの中に強く息づいていると存じます。一方でいえば、日本的にでき上った外国語像というものをこの際排除しなければならないということで、この力がわれわれを誘っているのだと思います。

それをもう少し敷衍いたしますと、やはり断片的な理解は排除するという

ことになると思います。ここでもしかし私は、断片的な理解はいかんとだけ申し上げているのではなくて、たとえばある国を理解するに際しまして、その国全体を非常によく知っている者は、その国のいいところを自分の国に持ち込んで改革しようとする意図を、往々にして全く失っております。

たとえばドイツならドイツでドイツというものを余り知らない者がドイツに行きますと、ドイツの一部を見て、ドイツはあんなにいいところがあるのに日本はこうだといって、日本に帰ってきて騒ぎたてる。それが、日本に対して、新しいものを導入するという一つの立派な働きになることもあるのだということを、一方で私たちは十分に踏まえておかなければいけないと思いますが、この国際化時代にはやはり断片的に理解されたものの危険性というものも、私たちは十分考えなければならない。

そうしますと、できるだけグローバルな総体というものに向かっていき、なまのそのままの形のものとは対決すべきである、単語の翻訳によって下手な訳文をつくるのではなくて、たとえ少しぐらい文章がわからなかったり、あるいは勘違いしても、その全体というものを生活の中で理解して、それによってわれわれの実践的な行動を立てていくべきなのだという考えがあると存じます。

もう一つ、これを指摘すると青柳さん、長谷川さんがお困りになるかもしれませんが、われわれの中には——これは非常に弱い力なので大して重きを持ってはおりませんし、また先ほどご質問をいただきました宇佐美さんにも申し上げることになるかと思いますが——学校における外国語教育に対して一つの対極性をつくろうと意図すると同時に、小さな対極性ではございますけれども、NHKで行なわれている外国語教育番組に対しても一つの対極性をつくりたいという気持ちが、どこかで自然に働いております。

全く正直に申し上げますが、たとえばドイツ語の番組などございますと、在日ドイツ人たちは、NHKの番組の中での芝居の情景を見ますと、普通テレビのスイッチを切ってしまいます。要するにとっても見てはいられないというのです。それで、多くの人がスイッチを切ってしまうというようなそういった状況を見ていますと、ドイツ人が見えても自然に見える状況の中で語学教育が行われなといけない、という頭が私どもに働いてくるのは自然だと存じます。国吉先生にそれを申し上げましたら、ドイツ語はまだいい、英語の方はなおひどいとおっしゃっておられましたが、（笑声）これは現実にあるものに対して悪いとかいいとか申し上げているのではなくて、われわれに、一つの対極性をつくろうとする刺激になっているという事実の指摘にとどまることでございます。

自分が authentic という一つの言葉をひねり出しながら、それを自分で辛じて解説してみせるということで、はなはだ申しわけないシンポジウムになってしまったわけでございますが、大体そんなところをまとめとさせていただきます、このセッションを終えさせていただけば幸いと存じます。どうも大変ありがとうございました。（拍手）

○田中（放送教育開発センター教授）

司会の辻先生、また、ご登壇の先生方、本当にどうもありがとうございました。大変実り多いシンポジウムになったように思います。ありがとうございました。